

9 佐倉藩士小柴宣雄の墓碑が語る

畠山 隆

大和田新田の成田街道沿いに佐倉藩士だった小柴宣雄とその子孫らの墓が並んだ一画がある（P33 大和田新田の屋号地図No. 1 ②を参照）。現在墓石の多くが倒れて台石に立て掛けられている状態にある。小柴宣雄の墓は台石を含めて高さは230 cm余、幅60～70 cm程の板碑状の石に碑文がぎっしり刻まれている（写真1）。なぜこの場所に元佐倉藩士の墓が建てられたのか。その碑文を解説し宣雄と子供たちの生涯を追ってみた。

1 小柴宣雄の経歴

宣雄は、碑文から読むと文化14年（1817）に佐倉藩士の子として生れ、明治20年（1887）に大和田新田の自宅で亡くなっている。初めは新之丞と称し、33歳のとき新一郎と改名、さらに晩年宣雄と改名した。父は長州藩士で江戸詰の縁であろう佐倉藩士小柴理兵衛の養子に迎えられたが、宣雄が4歳のときに不縁となり宣雄と娘1人を残して藩を去っている。もしかすると宣雄は父の顔を覚えていなかったかもしれない。

その後小柴家で厄介身分として育てられた宣雄は、天保2年15歳で御祐筆部屋見習いに取立てられ、以後御役方祐筆、郡代官、出羽柏倉代官、江戸留守居役補佐などの役職を全うした。資料で確認できる最高俸禄は35俵3人扶持で佐倉藩の中では中小姓格の給人であった。

明治2年改藩により書記となるが、明治4年の廃藩と同時に職を辞し大和田新田に居を移した。



1 小柴宣雄の墓碑

2 大和田新田での生活

このときの宣雄は55歳で、現代になぞらえると一昔前のサラリーマン定年に符合するが、当時とすればもう老年期に入った年代といえる。碑文その他の資料から推定すると妻と17歳の次男を頭に5人の子を抱えた7人家族であったようだ。佐倉藩では廃藩後、禄を失った藩士らのために士族授産事業として佐倉同協社や佐倉相済社を興しているが、宣雄がそれらに参加した形跡はない。宣雄はこの後16年間を大和田新田で過ごし明治20年71歳で生涯を終えた。

ではこの間どのような暮らしをしていたのだろうか。旧家を取材していくうちに、いくつかの情報を得ることができた。

宣雄の子孫の方々は近隣には在住しておら



2 小柴家住居跡地 新しい道路に変わった

ず、現在の小柴家の消息を知る人はいないが、古老の話によれば昭和の初期まで小柴の家は成田街道（296号線）から分岐している米本道に入ってすぐ西側の場所にあったという。住家のことを「小柴屋敷」と呼び、屋号に代わる名として「カンリ」と呼んでいたといわれる。また旧神明社の奥には「カンリヤマ」と呼ばれる一画もあった。「カンリ」とは官吏を指す言葉であろうか。今この「小柴屋敷」の場所は、成田街道のバイパスとして買収され新しい道路に変わろうとしている。（写真2）

つぎに文献から宣雄に関する資料を拾ってみた。

古文書では、白井家文書の「地価一筆限帳」に、畑を所有し麦を耕作していた記事が見られ農業で生計をたてていたことが窺われる。また大和田の醤油醸造業・雑賀芳蔵家の「明治20年12月醤油売上帳」には、大和田新田小柴巨雄（宣雄の間違ひと思われる）「上7升代84銭・下2升代10銭」という醤油を購入した記録が残されている。

石造物では、上区の八幡神社境内にある手水石と鳥居の二つの台石に、村の有力者とともに奉納者小柴宣雄の名が刻まれている外、神明社の庚申塔の碑には次男洋一の名前（本誌P49「3 塔本体と台座が異なる庚申塔群」を参照）があり、大和田新田在住の16年の間に地元住民と解け合いながら農村の生活に定着していった小柴家の姿をかいま見ることができる。

3 宣雄の子供たち

(1) 会津戊辰戦争で散った長男小次郎

碑文によれば、宣雄には7人の子供たちがいた。

長男の小次郎は、慶応4年官軍方に恭順の意を表した藩の方針に逆らって脱藩し、幕府方の草風隊に加わり下野から会津にかけて転戦、負傷して最後は会津若松で自決した。22歳であった。ここ大和田新田にある小次郎の墓は、おそらく父宣雄が建てたものであろう。墓の背面には「会津若松城防戦之際於藤原口戦死」とあるが、実際には藤原口（鬼怒川）の戦いで負傷し、逃れて行った会津若松で官軍に追い詰められ自決したのが事実のようである。三百年の徳川の恩顧に最後まで報いようと決起した若い純粋な志であったとしても、小柴家としては一時期脱藩者としての汚名を免れなかったであろう。小次郎の父宣雄が、廃藩後佐倉から隠れるようにひとり大和田新田の地に居を移した理由もこのあたりにあったのではなかろうか。



3 小柴家の墓 左端が宣雄の長男小次郎の墓

※大正2年に佐倉郷友会の手により、もうひとりの佐倉藩脱藩者木村隆吉とともに「両士記念之碑」が麻賀多神社境内に建てられ、没後45年ぶりに小次郎の名誉は回復された。

(2) その他の子供たち

次男洋一は千葉県職員となり家督を継いだ。まもなく明治26年39歳で早世した。

三男保人は明治13年東大理学部卒業後、内務省土木局に入り北上川改修工事などを手掛け後年工学博士になり活躍、近代土木界の嚆矢として名を残した。

四男熊男は、寺澤家の養子となり東北日報社（河北新報の前身）の従軍記者として日清戦争に参加し、講和後の明治28年11月台湾で没した。32歳であった。

長女富士は、榎本武揚率いる幕府艦隊の回天丸船長となった甲賀源吾のもとに嫁いたが、甲賀が戦死したのち林務官高橋琢也と再婚した。この富士のことについては、宣雄の碑を撰文した依田百川（学海）が『学海日録』の日記の中で、鶏卵一箱を持って訪れた富士が、会津で死んだ兄小次郎のために伝記を書いてほしいと請われたという興味あるエピソードを書き留めている。

このように宣雄の子供たちは、幕末から維新にかけての激動期をそれぞれに異なる道を歩み多様な境遇をたどったことが知られよう。

4 依田学海の撰文

練齋小柴君墓碑名で始まる宣雄の墓の碑文は、前述のとおり依田学海の撰文によるものである。学海は、佐倉藩の中で家柄はそう高くはなかったが、その才能を買われて江戸留守居役から維新後は佐倉藩権大参事に就いたほか、その後も太政官修史局や文部省書記官など中央の官職に請われて就任するなど後半世に活躍した異色の藩士である。官職を引いた後も学者・文人として漢詩・文学・演劇評論など多くの文献を残している。

その学海が宣雄の碑文を作ったいきさつは、碑文の中に「三子、君ヲ千葉郡大和田新田字新木戸前二葬ル」「来リテ余ニ銘ヲ請フ」とあるとおり、3人の子供たちが亡くなった父と兄そして自分たち小柴家のために撰文を依頼したものと思われる。宣雄がまだ新一郎を名乗っていた慶応3年2月に、学海は江戸藩邸の留守居役を仰付けられたが、同時に新一郎もその部下として仕えているので、学海はおそらく宣雄の妻子らをよく知っていたはずで、子供らの頼みにはすすんで応諾したことであろう。学海はまた小次郎の会津での死を深く心に留めていたようで、小次郎のことを書き留めたいいくつかの別の記事も残っている。

膨大な日誌で知られる『学海日録』の中の明治21年11月23日の項に「小柴練齋の墓誌を撰す」、翌24日に「小柴練齋の碑銘なる」との記事があり、この碑文がわずか2日間の推敲で作られていたことがわかる。文献上でこうした墓碑を建てた経緯が確かめられるのも数少ない事例であろう。

なお、碑文を書いた佐治自謙は、佐倉藩の年寄を勤めた佐治三左衛門である。

以上見てきたように大和田新田には、維新後ここを生活基盤として定着した元佐倉藩士小柴宣雄と、その子供で戊辰戦争によって夭折した小次郎の墓が存在するのだが、このことは地元の人でさえほとんど知られていない。

現在の墓地は小柴家とは縁のない地主の方の善意で守られてはいるが、296号線道路拡幅の予定区画でもありこのままでは無縁仏として将来撤去されることも予見される。この碑に限ることはないが歴史を語る貴重な個人の石造物を今後どのように維持管理していけば良いのか、うまい知恵はないものであろうか。

以下は小柴宣雄の墓碑名と釈文である。

練齋小柴君墓碣名

君諱宣雄初稱新之丞後改新一郎號練齋父忠介長州人來爲佐倉藩士小柴理兵衛義子有故不嗣理兵衛復養他子名彌助命君爲之子初以善書補右筆歷徒目付留守居中役嘉永七季擢代官役即郡職也給歲俸三十苞廩三口君好學通經史兼妙筆法受業福山人小島五一又修長沼氏兵學其爲右筆兼藩覺教員蓋右筆俗吏君乃能如此性廉直愨實以欺人爲恥其爲郡職直情徑行與同僚忤不得久在近地出管別邑在出羽柏倉者居數年治績漸著慶應二年增秩進班遷爲府田主稅吏以藩士管幕府田會計繁雜君日夜籌算秩然整理明治二年改藩制爲書記無幾藩廢不復出仕廿季十一月廿二日歿于佐倉大和田新田私宅享年七十有一娶川島氏子四長曰重稷稱小次郎有膽略通佛蘭西學兼好武術戊辰變與志士舉兵走會津戰負創在病房官軍逼城燒之乃自殺時年二十一次曰洋一任千葉縣屬次曰保人出仕內務任技師次曰熊男稱寺澤氏女三曰富士嫁林務官高橋琢也曰結曰堂嫁南德太郎三子葬君子千葉郡大和田新田字新木戸前來請銘余知君久矣安忍不銘其銘曰
嗚呼練齋筆法遒勁人唯知其書不知其心正則筆亦正爲吏十載自持廉潔貽惠子孫聯綿不絕

明治廿一季十二月正六位依田百川撰 佐治自謙書 廣瀬音五郎鐫

(釈文)

練齋小柴君墓碣名

君諱宣雄、初メ新之丞ト稱シ、後チ新一郎ト改メ、練齋ト号ス。父ハ忠介、長州ノ人。來リテ佐倉藩士小柴理兵衛ノ義子(養子)ト爲ル。故有リテ嗣ガズ、理兵衛復他子ヲ養フ、名ハ彌助。命ジテ君ヲ之ノ子ト爲ス。初メ書ヲ善クスルヲ以テ右筆ニ補サル。徒目付留守居中役ヲ歴テ、嘉永七季(年)代官役ニ擢ンデラル。即チ郡職也。歲俸三十苞(米三十俵)廩三口(三人扶持)ヲ給サル。君ハ學ヲ好ミ經史ニ通ジ、兼テ筆法ニ妙タリ。業ヲ福山ノ人小島五一ニ受ケ、又長沼氏ノ兵學ヲ修ム。其レ右筆兼藩覺教員ト爲レリ。蓋ソ(どうして)右筆俗吏ガ君ノ能此レニ如クカ(匹敵するといふのか)。性ハ廉直(心正しく)愨實(憤み深く正直)ニシテ、人ヲ欺クヲ恥ト爲ス。其レ郡職爲ルニ直情徑行、同僚ト忤ラヒ、久シク近地ニ在ルヲ得ズ。管ヲ出デ邑ニ別レ出羽柏倉ニ在リテ者、居ルコト數年ニシテ漸ク治績著ハシ、慶應二年秩(扶持)ヲ増シ班(席次)ヲ進メ、遷リテ府田主稅吏(事の古字)ト爲ル。藩士ヲ以テ幕府ノ田ヲ管セリ。會計繁雜ナレド、君日夜籌算(計算)シ秩然整理ス。

明治二年藩制改マリ書記ト為ル。幾バクモ無ク藩廢ス。出仕ニ復サズ。廿季(年)十一月廿二日佐倉大和田新田私宅ニ歿ス。享年七十有一。川島氏ヲ娶リ、子(男子)四アリ。長曰ク重稜、小次郎ト称ス。胆略(大胆で策略に富む)有り、仏蘭西学ニ通ズ、兼テ武術ヲ好ム。戊辰ノ變ニ志士ト挙兵シ会津ニ走り戦ヒテ創ヲ負フ。病房ニ在リテ官軍城ニ逼リ之ヲ焼ク。乃チ自殺ス。時二年二十一。次曰ク洋一、千葉縣屬ニ任ズ。次曰ク保人、内務(省)ニ出仕シ技師ニ任ズ。次曰ク熊男、寺澤氏ヲ称ス。女ニアリ。曰ク富土、林務官高橋琢也ニ嫁ス。曰ク結、曰ク堂ハ南徳太郎ニ嫁ス。三子、君ヲ千葉郡大和田新田字新木戸前ニ葬ル。来リテ余ニ銘ヲ請フ。君ヲ知ルコト久シキ矣。安クソゾ銘セザルヲ忍バン。其銘ニ曰ク、嗚呼練齋、筆法遒勁(書画・文章など力強いこと)ニシテ、人唯其ノ書ヲ知レドモ、其ノ心正シク則チ筆モ亦正シキヲ知ラズ、吏ト為リテ十載、自ラ廉潔ヲ持シ貽(子孫)ニ恵マレ、子孫聯綿トシテ絶ヘズ。

明治廿一季(年)十二月正六位依田百川撰 佐治自謙書 廣瀬音五郎鐫

- 【参考文献】 『八千代市の歴史』資料編 近代現代Ⅱ 2006 八千代市
『佐倉市史』巻二・三 1973・79 佐倉市
「佐倉藩保受録」 佐倉市史編さん担当
「佐倉藩堀田氏分限帳」慶応元年 (印旛村史より)
『明治に生きた 佐倉藩ゆかりの人々』1997 内田儀久 聚海書林
『学海日録』第七・八巻 1990・91 学海日録研究会 岩波書店
『会津戊辰戦史』(復刻版)2003 山川健次郎 マツノ書店